

# 日本古代船舶の型式

西村 眞次

未熟な私の船舶史に關する研究の一端を先輩竝に諸君の前で御話することは、私に取つて光榮の至りであります。曩に當學會から御通知になつて居る題に依りますと、『日本古代船舶の型式』といふことになつて居りますが、一々古代船舶の型式を申述べます時間がありませんからして、それらに就きましては極簡單に申述べまして、主として列舟に就て述べて見たいと思ひます。始あつての終でありまして現代研究の盛んな今日に私達のやうな古い研究は非常にアナクロニズムのやうでありますけれども、實はそれが分らなければ現代の日本人其自身分らない。私が古代船舶の研究を始めましたのは、全く日本人のオリジンを明かにする爲めであります。古代の船舶に就ては大阪の船大工であつた金澤兼光カネミツといふ人が『和漢船用集』といふ本を、確か十二巻でありましたか、江戸時代に書いて、其中で詳述して居ります。しかし是は、船舶史としては如何にも非科學的でありまして、今日の私達はそれを見ましても満足することが出来ません。東の英國といはれる海國日本に於て船の歴史が僅か一冊しかないといふのは何とい

ふ耻でありませう。此缺陷を充たさうといふのが私の大それた野心でもありません。しかし自分に取つては野心でありまして、それが學界に取つては多少の利益になりませう。さうなれば死んでも差支ないといふ覺悟で、私は研究を始めましたが、尙ほ未完成でありまして、御耳に入れるまでには進んで居りませぬが、暫くの間御清聴を煩はしたのであります。

極初めから申しますと、一体水上運搬具といふものがどうして出来たかといふことが問題であります。人類の住む所は無論陸上であります。陸上に住んで、色々の事の爲めに彼方此方に行く。と、川があり湖水があり、さうして又海がある。それらの水が何時でも彼等の交通を防げた此障害を排除しなければならぬといふことが、彼等原始人の生活の安定に最も必要な第一要件でありまして、其結果、此水上運搬具といふものが起つて来た。其發生に就ては、丁度宗教の起原と同じく二つの假定説があります。即ち一つはフレザーのやうな觀方で、ストラチファイケーション、シエオリイ即ち、層位説、ステップを幾つも重ねて發達して来たといふ説であります。もう一つは詰り一種のシンクロニゼーション、シエオリイ、即ち同時發生説で、同時にいくつもの物が發生して、それが平行線を發達して来たといふ説であるから二つの説がありますが、此何れを探るかといへば、私は兩者を共に採用する、後に同時發生説を探りたいと思ひます。

此層位説に依りますと、一番初に出来た水上運搬具は浮木即ち *Floater* であります。浮木と申します

と大變語弊がありますけれども、自然に浮力を持つてゐるのを水に浮かすので、南洋土人はコ、ナットを使つて居ります。それから又或地方に行くに瓢箪の大きなやつを浮木に使つて居ります。又水牛の皮を用ゐる。此動物の腸を抜きまして一本の足から空氣が通ふやうにして、其足から空氣を吹入れまして、腹全体に空氣を詰めこみ、それに人が乗つて行くのであります。是が浮木で最も原始的な水上運搬具であります。是はアツシリヤの石面低彫にも遺つてゐて、餘程古い時代から用ゐられてゐたのみならず、現在でさへも尙ほ浮木を使つて居ります。それから朝鮮に於きましては此浮木に瓢箪を使ひました。瓢箪が船を浮かしたり人を浮かしたりしました。例へば御承知の『三國通鑑』などに出て來る新羅の瓠公、日本流に云へば瓠ヒヤコの首オモトは元と倭人で、瓠を腰にして彼方へ渡つて行つたといふ傳説がございますが、現在に於ても朝鮮の濟州嶋では瓢箪を浮木に使つて居るのであります。それについては私は已に研究いたしました。The Gourd Ship といふ論文を書いて出版しました。(未完)

曉 山 雲

千 家 鐵 磨

明けぬるか宇迦の山邊は雲ぬてか

まうでござゝろのほの白きかな

勅題

堀内文治郎

志津か家の烟りもそひてなひくらむ

信水謹詠

富士の高峯の曉の雲

勅題 恭賦

西有慧觀

曙色分明梳曉髮

金枝玉葉擁仙斑

卷舒自在埋山腹

露出芙蓉八朶新